

久賀の古波止

ふるはと
 《周防大島町文化財保護審議会委員 西本芳隆》

地元にとつて古波止はむしろ「フルミナト」と言った方がなじみ深いのではないか。海水浴、磯遊びや釣りなど大崎鼻の遊びの拠点であった懐かしさを覚える人も多いことだろう。

久賀浦は深い湾人がなく、砂浜は北風を受けて、港としての自然条件は非常に不良であった。季節により、浜辺へ船をつけることができず、風が出ると近村に係船し身一つで帰って来るような状況であった。また、川を遡上し係船する場合も、係船出船とも潮待が必要となり、盛んであった罾網では、沖に罾の群れを見ても潮によっては出船不能で、どうしようもなかったという。

この不便を解消すべく、庄屋、船持などが集まり、波止の建設を発起した。しかし、資金調達には難渋し、最終的に庄屋格の伊藤惣左衛門に頼み、良い船溜りがなく、廻船浦、漁浦としての発展を案じていた惣左衛門はこれを承諾した。

古波止は文政9年（1826）春に着工し、10月に完成。これにより千石以上の船の積荷ができ、干潮時の係船も可能になった。網船や釣船は風が吹

いても波止の中に入れるまでは漁に励むことができ、冬春の風の強いときには波止の中で小魚を獲ることもできるようになった。

総工費八十文銭52貫550匁9分。ただ、発起人は工事半ばにして亡くなったため、惣左衛門は借銀の返済をひとりで負うこととなった。これは、波止の完成後、不漁凶年が続き、大風による多くの船の破損、浦の大火などが重なり、船持からの返済金の納入が滞ったことにもよる。このため、惣左衛門は先祖伝来の田畑を売り、文字どおり私財を投げうって借銀返済に充てたという。

こうして古波止は、伊藤惣左衛門をはじめ多くの先人の努力が実って出来上がった。その後、船の大型化、浦の中止部から東に偏っている不便さ、県道ができるまでは道らしき道がないこと、溜まりは深いものの片側のみ西方に突き出しているのみで北西風の悩みは完全に解消されていないなど、時代の変遷に伴い次第に貧弱なものとなっていった。

そして、古波止建設から54年後、明

治13年（1880）に新波止が建設されるに伴い、古波止は主な役割を終えることとなった。

その後、総石積造りによる古波止は小破によるコンクリート補修を受けながらもひっそりとかつての姿を伝えていたが、平成16年（2004）の台風23号により完全に破損し、現在のコンクリート造りの姿に変えて、久賀湾にたずんで歴史を刻んでいる。



石積みだった頃の古波止（宮本常一撮影、1960年）

◎参考文献

『山口県久賀町誌』（1954年）

文化振興事業の補助金交付団体が決定しました

町内の団体から公募していた文化振興事業について、審査会の結果が町長に報告され、次の1団体の事業が採択されました。

文化振興事業は、地域文化の振興や地域文化に親しむ環境づくり、住民参加型の文化振興などの活動に対して20万円を上限に交付されるもので、各団体の個性豊かな事業に期待が寄せられます。

令和3年度 文化振興事業補助金採択団体

団体名	事業名（事業概要）
小松地区街並み思い出保存会	小松地区「街並みの記録」及び「年中行事等の思い出エピソード」等の記録事業 《略称「小松地区街並み思い出保存」事業》

■問い合わせ 社会教育課 ☎0820（78）2205